

井土靈山の生涯と事績¹⁾

井 土 慎 二

はじめに

日本漢詩の名作を収める『漢詩名作集成 日本編』(李・宇野・松野 2016)には明治期の漢詩数十首が採録されている。うち一首は井土靈山(本名井土經重、以後靈山と略称)の手になるものである。その漢詩には靈山について「明治時代の詩人で、生涯の事績は詳らかではない」との注釈が添えられている。靈山の事蹟が不詳とされていることは、靈山とともにその漢詩が採録されている國分青厓、内藤湖南、夏目漱石などに略歴が付されているのと対照的である。

これは靈山が数十冊の本を著した多作な著述家であったことを考えれば不思議にも思えるが、故無きことではない。靈山の事蹟や著作の多くは漢詩人としてのものではない。彼の著作には文芸の範疇に入らず、よって「靈山」という雅号が用いられていないものも多い。靈山には漢詩人のみならず、教育家、民権家、新聞人、漢学者などの顔があり、その事蹟が一分野におさまらない。著作も漢詩文にとどまらず憲法、戦時財政、地域開発を主題にしたものまである。

彼の経歴もまた曲折に満ちたものである。学業優秀で高水準の教育を受け、20歳前後で小学校長となった。自由民権運動に身を投じてのち下級官吏となり、さらに操觚界に入っては新聞の主筆も務めた。漢詩をよくし、晩年には詩書画の大家として知られた。住所は一定せず、福島、宮城、大阪、岡山、東京では麻布、京橋、巢鴨などに住み、国外では中国に遊んだ。

「変わった人」(辻・井土・板垣 2002: 75)でもあったらしい。結城蕃堂(琢)曰く「磐城井土靈山。奇士也。作奇詩。著奇文。寫奇字。吐奇語。但以奇行過人」²⁾。「磊落不羈」(川口 1929: 3)で「容易に人に屈せず」(南畫鑑賞會 1935)自らが勤める新聞社の社長と対立して退社し(井土 1911a)「不良老人」を名乗った(汪 2014)。

本稿の目的はこうに分野的にも地域的にも拡散している靈山の事蹟をまとめ、その経歴を明らかにすることである。彼の事蹟と経歴を知ることには、明治・大正時代の漢学者たちの置かれた境遇やその思想の研究の観点から意義がある。

日本において漢詩は明治時代後期から衰退を始めたため、今日においては明治・大正・昭和時代の漢詩人もまた顧みられることが少ない。しかし当時の主だった漢詩人³⁾の一人であった靈山には数多くの漢詩及び著作があり、言行の記録⁴⁾も残ることから、その思考の一端を窺うこともできる。このため、靈山の事蹟と経歴は幕末に生まれた日本漢詩人がどのような経歴と

思想を持っていたかについての知見を提供する。

靈山の経歴は自由民権運動に共鳴した若者が運動が衰退する中でとった進路の一例でもある。靈山は自由民権運動に参加し、その新聞人としての経歴も民権派の新聞で始まるが、その後政治的な言論活動からは離れていき、その著述の内容も紀行文、時事評論、詩書画などに変わっていく。自由民権運動の研究では政界入りしたものに多くの紙幅が割かれる傾向があるが、政治的な言論活動から離れていった靈山のような民権家の経歴を知るとは自由民権運動を担った人々の全体像を知る一助となろう⁵⁾。

本稿では、靈山の生涯を住址と奉職先に基づいて区分し、その事績と経歴を概観する。

「井土」姓

靈山の事略に入る前に「井土」姓の表記及び読みについて説明する。

靈山の姓の表記を「井上」とする出版物があるが、これは「土」と「上」の字体が似ていることから文選や植字の過程で起こった誤植のようである。靈山自身が創刊し編輯した雑誌『書道及畫道』においてさえ、僅か数ページの記事(香川 1917b: 52, 54)に「井上靈山」と「井土^{いのうへれいざん}靈山^{みのど}」の両方が登場する例がある。しかし靈山本人が関わった殆ど全ての出版物では靈山の姓として「井土」が印刷されていることや、書簡では自らの姓を一貫して「井土」と表記していることから(辻・井土・板垣 2002: 59, 63、奥州市後藤新平記念館 2009)、靈山の姓が「井土」であることはまず間違いが無い。

「井土」の読みには出版物によって様々な変異が認められる。『昭和文人名鑑』(川口 1929: 3)では、項目の配列順から判断すると「井土」は「みのど」と読まれているようである。『ジャーナリスト人名事典 明治一戦前編』(山田 2014: 44)は「いのど」としている。『讀賣新聞』一記者(1916)の新聞記事でも「井土」に振られたルビは「ゐのと」ないしは「ゐのど」と判読できる。

一方、『改訂増補漢文學者總覧』(長澤 2011: 397)では「井土^(ママ)靈山」の苗字はその項目の配列から察するに「いど」と読まれているようであり、さらに1905年の『東京朝日新聞』に載った靈山の知人による記事(東京朝日新聞 1905)でも「ゐど」とルビが振られている。『日本近代文学大事典』(日本近代文学館 1977: 146)における「井土靈山」の項でもその読みは「いど」である。

では、靈山の姓は「ゐのど(いのど)」だったのか、それとも「ゐど(いど)」だったのか。

靈山自身が主筆を務めていた時期の『山陽新報』に掲載された記事(山陽新報 1898)において「井土」には「ゐど」のルビが振られている。靈山の編輯による雑誌『書道及畫道』においても、やはり「井土」の大半には「ゐど」のルビが振られている。また、後述するように、靈山の「井土」姓は、その「ゐど(いど)」読みが珍しくない筑前のものであり⁶⁾、靈山の子

孫も「井土^{いど}」を名乗る。これらの事実に鑑みれば、靈山自身が用いた「井土」の読みはおそらく「みど」であっただろう。

第一期 東北

靈山は1859年1月29日に相馬中村藩士、和田久太夫祥重の二男、和田經重（字は子常）として生まれた（若松 2016a）。井土に改姓するのは1885年である。「靈山」は改姓後、おそらく30歳代で自身の著作物に使い始めた雅号である⁷⁾。

彼は「年少郷里の親戚錦織晩香に就き漢學を修め」（川口 1929: 3）た。ここで得た漢学の素養は漢学者としての晩年の井土靈山につながっていく。1871年に靈山は和田家の土着帰農に伴い、中村城下から後に福島県原町市となる中郷高平村に移住⁸⁾、1876年1月には原町小学校の前身である磐前県管下第八十三番南新田小学の雇教師となった（若松 2002: 26）。同年8月に辞職し、仙台の官立宮城師範学校に入学、公立仙台師範学校に校名変更後の1878年7月15日に同校の上等小学科を「福島縣士族 和田經重」として卒業する（若松 2002: 26）。ときに19歳7か月であった。

その後、宮城県柴田郡船岡村で小学校長となった（柴田郡教育會 1925: 246）が1881年からは原町に戻り小学校の主長を約1年半の間務める（若松 2002: 26）。靈山は自らが雇教師を務めた学校の主長に就任したことになるが、1882年には早くも辞任する（若松 2002: 27）。

靈山が自由党の通信委員だったとの記述が1883年1月付の「平島松尾訊問調書」に残っていることから⁹⁾、彼が自由民権運動に参加していたことがわかる。靈山の主長辞任と民権運動の弾圧との間の関連の有無は不明である。ともあれ1882年11月には福島事件が起こったので、1882年時点で靈山が自由党通信委員であったのであれば、彼は同年中には原町を離れただろう。教育家としての靈山の経歴はおそらくこの時に終わった。

相馬や東北との縁は靈山が原町を離れたのちも切れたわけではなかった。相馬順胤への訪問¹⁰⁾、在京相馬人の親睦会での演説（井土 1889）、旧相馬藩領の民権家であった半谷清壽への協力（若松 2002: 33-36）、大正期の相馬郷友会会報『相馬郷』への詩文の寄稿（若松 2016c）、自らの訳書への同郷の佐藤晴明の序文の掲載（スウィントン・井土・久米 1886: 11-13）などから相馬との縁が長期間続いたことがわかる。また、「東北記者會」での演説（東京朝日新聞 1910）、『福島日日新聞』への寄稿（若松 2016d）、高橋次郎（太華）（井土 1927: 30）、原敏、後藤新平などの東北人との交際、仙台出身の漢詩人國分青厓（高胤）への師事¹¹⁾などを通して東北との縁も長く続いた。

第二期 東京

原町小学校主長を辞任した1882年以降の靈山の動静は詳らかにしない。後述するように、1885年1月には靈山は東京で法律学関連の諸講義の筆録者となっている。では1882年から1885年の間、靈山は何をしていたのか。

靈山がこの数年の間に沼間守一と島田三郎という著名な民権家がそれぞれ社長と主筆を務めていた時期の『東京横濱毎日新聞』に勤めたことを示唆する複数の記述が存在する。

その一つは『昭和文人名鑑』中の「井土經重」の項（川口1929: 3）にある「東京に來り始め毎日新聞に入り […]」との記述である。この記述は靈山の上京後初めての勤め先が『毎日新聞』¹²⁾であったことを示唆する。そうであったなら、この記述中の『毎日新聞』は『東京横濱毎日新聞』を指す筈である。なぜなら、同紙は『横濱毎日新聞』から『東京横濱毎日新聞』に改称し編輯局を東京西紺屋町26番地に遷した1879年11月18日（東京横濱毎日新聞1879）から1886年4月30日に至るまでの期間においては『東京横濱毎日新聞』という名称で存在していたからである¹³⁾。『毎日新聞』に改題したのは1886年5月1日である（毎日新聞1886）。

靈山が1882年から1885年の間に『東京横濱毎日新聞』に勤めたことを示唆するいま一つの記述は、靈山の追悼記事中の略歴欄にある（南畫鑑賞1935）。そこには「東京に出で島田三郎氏の經營に係る東京横濱毎日新聞に編輯長として敏腕を揮ふ」との記述がある¹⁴⁾。後述するように靈山は1885年から官途に就くので、上京後『東京横濱毎日新聞』で働いたのであれば、それが可能であった期間は1882年から1885年の間をおいてない。なぜなら『東京横濱毎日新聞』という名称の新聞は靈山が警官練習所での勤務を終えたころには既に存在しなくなっていたからである。

さらに靈山が後に主筆を務める『山陽新報』の社史（山陽新聞百二十年史編集委員会1999: 72）に記された靈山の略歴には「沼間守一の門下」と記されている。これは靈山が沼間守一が社長だった当時の『東京横濱毎日新聞』で働いていたことを示すものかもしれない。1879年11月から『東京横濱毎日新聞』の社長は沼間守一であったからである¹⁵⁾。

1882年から1885年の間に靈山が『東京横濱毎日新聞』に関わる時期があったことを示唆する記述は上掲のようなものから成る。これらの記述は『東京横濱毎日新聞』と改題後の『毎日新聞』を峻別しておらず、そのため、靈山の『毎日新聞』在籍（後述）を誤って『東京横濱毎日新聞』在籍と見做している可能性を否定できない。

しかし現状では靈山は10年ほどを隔てて『東京横濱毎日新聞』と『毎日新聞』の両方に在籍したと見なすほうがよさそうである。なぜなら、1886年の出版である靈山の初の訳書『斯氏萬國史鑑』（スウィントン・井土・久米1886）に島田三郎が序文を寄せているからである。靈山が1886年時点で既に島田三郎と知己であったのでなければ島田に序文を需むことは考えにくい。そう考えれば、島田の当該の序文は、社長を沼間守一、主筆を島田三郎としていた頃

の『東京横濱毎日新聞』に靈山が勤めていたという推測を支持するものといえる。

第三期 東京・麻布

1885年1月付の資料に靈山は江木衷の講述による『法理學講義』の筆録者として登場する¹⁶⁾。かつては口述筆記が新聞記者の技能の one に数えられていたことを考えれば（読書新聞社編集部 1932: 59-63）、靈山は新聞社勤めを通してこの技能を身に付け¹⁷⁾、もって世過ぎの糧としていたのかもしれない。ともあれ靈山は1885年から1889年に至るまで筆録を自身の生業としている。

『法理學講義』筆録の時点では靈山は未だ和田姓であったが、数か月のうちに結婚して井土に改姓している。結婚相手は下宿先であった東京府麻布区我善坊町50番地の井土俊右エ門としげの三女、井土すみ（1863～1946）だった¹⁸⁾。靈山自身の族籍は既述のように「福島縣土族」であったが、1886年7月に出版された靈山の訳書の奥付には「井土經重 東京府平民」とある。井土家への婿入りにともなって分籍したようである¹⁹⁾。井土家は筑前秋月藩土の家系であったが、結婚当時のすみの族籍は不明である²⁰⁾。靈山は結婚後も我善坊町50番地に住み続ける²¹⁾。

さて、井土姓となった靈山は1885年4月に警官練習所なる新設の警察幹部養成機関に下級官吏として就職した。ここでも職務は講義筆録で、開所間もない1885年4月21日には既に「井土經重」として筆録を始めている²²⁾。警官練習所の第一回受業生の入所は4月15日であった（高橋 1960: 62）。つまり靈山は開設当初から警官練習所に勤めていた。靈山は麻布区我善坊町の自宅から数百メートルの距離にある赤坂区葵町の警官練習所に1885年4月の開校時から勤務を始め、1889年3月末の廃校時もしくはその間際まで勤めあげたようである²³⁾。靈山の俸給は15円であった²⁴⁾。当時の職人や職工の月収と比べればかなりの高水準であり、一方で官吏の俸給としては最低に近い水準である（小野 1995: 439-444）。靈山がおそらく在籍した時期の『東京横濱毎日新聞』は「財政が困難で待遇もよからず、社員もみな質素であつた」（久保田 1930: 248）ようなので、靈山にとっては俸給15円は好待遇であったと想像できる。

警官練習所において靈山は「筆記主任」として教官の講義を筆録した²⁵⁾。警官練習所ではほぼ毎日講義があつた（高橋 1960: 67-70）。靈山はこう記している。「警察法ニ治刑法ニ刑法ニ、其講義筆録ハ一ニ余カ擔任スル所ナリシヲ以テ日々机上ニ堆ヲ爲シ、一讀セントスルモ尚ホ其暇ナキヲ憂フ」（橋本・井土 1886: 691）。この奮闘の成果が靈山の筆録による『警察講義録』（ヘーン・湯目・井土 1886）、『治刑法講義録』（橋本・井土 1886）、『刑法講義録』（高木・井土 1886）、『日本刑法講義筆記』（磯部・井土 1888）、『現行日本治刑法講義』（磯部・井土 1889a, 1889b）である。靈山は警察の幹部候補生たちと机を並べて講義を受け、当時の法律学の新知識を得ることとなった²⁶⁾。靈山は晩年には詩書画の大家として知られることになるのだ

が、この時期に関わった出版物について言えば、大半が法律に関連したものである²⁷⁾。

警官練習所時代には靈山自身の手になる初の著書と訳書も出版されている。

靈山初の著書は『大日本帝國憲法註釋』（井土・磯部 1889）であった。註釈と題されてはいるが、60頁に及ぶ憲法総論から始まり、総頁数は500を超える大部の書物である。この書物には警官練習所で教鞭を執った磯部四郎と久松定弘が関わっており、前者は校訂及び序文、後者は靈山を指して「予カ友井土君」と記す跋文を提供している。この書物には、井上馨と金井之恭の題辞及び國分青厓の題詩も寄せられている。

靈山初の訳書は William Swinton の1879年版『Outlines of the world's history』の緒論と第一篇の邦訳である。『斯氏萬國史鑑』と題されたこの訳書には前述のように島田三郎が序文（スウィントン・井土・久米 1886: 7-10）を寄せており、さらに法学者の江木衷（冷灰）から「友人井土君此書ヲ譯シ將ニ世ニ公ケニセントス〔…〕譯字允當能ク原意ヲ寫出シテ洩ス所ナシ」（スウィントン・井土・久米 1886: 5）とのお墨付きを貰っている²⁸⁾。ただし、靈山は原書を独力で邦訳したのではないかもしれない。なぜなら若松（2010: 169）が指摘するように『Outlines of the world's history』はおそらく警官練習所での英語の授業で使われていたので、靈山がこれを聴講したのであればその原意を写出することは難しくないと考えられるからである。同所で英語を講じていた久米金彌が同書の校訂を手掛けていることもこの推測を支持する。靈山に英語の読解がある程度できたとしても²⁹⁾、同書は実質上は久米と靈山の共訳書であったと推測できる³⁰⁾。

上述の出版物全てに警官練習所の教官が関わっている。職員数が10人前後、講師数はそれを下回る小所帯であった警官練習所で靈山は教官たちと親しくなったと想像される。同所で1888年から衛生法を講じていた後藤新平とも靈山は後に「九州各地に游展」したり（「本會顧問井土靈山翁逝く」1935: 57）している³¹⁾。

第四期 東京・京橋

警官練習所は1889年に廃止される。その後の靈山の奉職先は記録で確認できる限りでは『改進黨新聞』である。改進黨新聞社は当時新聞街であった東京市京橋区の南鞘町にあった³²⁾。警官練習所廃止後数年のうちに靈山は居を麻布区から京橋区の桶町5番地に移す³³⁾。

『改進黨新聞』にいた靈山が確認できるのは1894年の『毎日新聞』の4月17日の記事においてである（毎日新聞 1894）。その前日相馬事件関連の裁判に証人として出廷した靈山について『毎日新聞』の記者が「記者の知己改進黨新聞記者井土經正氏^(ママ)」と書いていることから靈山が『改進黨新聞』に勤務していたことがわかる³⁴⁾。

『改進黨新聞』は1894年8月に『開花新聞』と改題された（土屋 2002: 185）が、その前後に靈山はまた勤務先を変えている。靈山は1895年時点で、1894年10月に発刊され翌年の1895年

3月には廃刊を迎えた『實業新聞』（遠藤 2007: 4）にいた。堺利彦の自伝（堺 1970: 120）には『實業新聞』に「古顔の記者として、硬派の井土靈山君」がいたことが記されている³⁵⁾。靈山はこの『實業新聞』にも廃刊もしくはその寸前まで在籍していたことが堺の記述から読み取れる。

『實業新聞』の廃刊から3年強の間、靈山は島田三郎を社長とする『毎日新聞』と『大阪毎日新聞』に、おそらくこの順序で奉職する³⁶⁾。勤め先を頻繁に変えているように見えるが、この後赴く岡山では僅か2年余りの間に2つの新聞社に就職し辞任することを考えれば、驚くべき頻度ではない。1896年を少しさかのぼるちょうどこの頃に靈山と知り合った漢詩人の結城蕃堂（琢）は後に、靈山が在籍した新聞社を「東京毎日³⁷⁾。大阪毎日。山陽新報。中國民報。東京毎夕」と列挙している³⁸⁾。これは靈山の奉職先を時系列に沿って列挙しているもののように見える³⁹⁾。そうであれば、この記述も靈山が『毎日新聞』と『大阪毎日新聞』の両紙に勤めたことを示唆しているといえる。靈山が『改進黨新聞』『實業新聞』『毎日新聞』に勤め、おそらくその後に『大阪毎日新聞』に入社したという推測に大きな間違いはないだろう。

靈山が『大阪毎日新聞』に移った時期は不明である。靈山は1896年から1897年まで東京で様々な組織の役職に就いている。1896年6月5日に東京の「日暹協會準備會」の世話人を高橋與市等とともに務めたり（毎日新聞 1896a、村嶋 2013: 18）、1896年11月30日に進歩黨主義の「同志俱樂部」の評議員に選ばれたり（東京朝日新聞 1896、毎日新聞 1896b）、1897年2月5日に「社會問題研究會」設立⁴⁰⁾とともに評議員となったりしている（幸徳 1970: 269）。

靈山が大阪に居を構えながら東京にあるこれらの役職を務めたとは考えにくい。靈山は『改進黨新聞』『實業新聞』『毎日新聞』と同様京橋区に所在した『大阪毎日新聞』の東京支局に勤務したのかもしれない。仮に大阪に転居していたのだとしても大阪は長くて一年強の僑居であったであろう。なぜなら1898年8月14日には靈山は『山陽新報』の主筆となって岡山に居を移すからである。

『大阪毎日新聞』には1897年3月から編輯監理（一年後に社長）として藤田組総支配人の本山彦一⁴¹⁾に招かれた原敬が在籍していた（奥 1999: 40、小野 1925: 36）。靈山には原敬との人脈があり、友人の要望を原に取り次いだり、原に就職口を世話してもらったりしている⁴²⁾。この人脈は『大阪毎日新聞』勤務で始まったのかもしれない。

第五期 岡山

1898年8月14日、靈山は長澤別天（説）の後を襲って『山陽新報』の主筆となり、岡山に転居した⁴³⁾。「岡山市二日市町卅番邸」に居を構えたようである（井土 1899）。『山陽新報』1899年元旦掲載の自身の記名記事「送窮瘠愚」において「去年の夏予の岡山に來たるや孤劍漂零一人の友なく一字の師なく一篇の書なく〔…〕書なきに窮し友なきに窮し師なきに學なき

に識なきに經營慘澹他人の想ひ到らざるものあり」(靈山醉筆 1899)と書いているところから察するに、靈山は『山陽新報』主筆就任時まで岡山とは無縁だったようである。

藤井(1949: 67)によれば「當時の新聞は主筆がその新聞の人気を左右する時代であつたので、どの新聞も主筆には普通記者の數倍ないし十倍の高給を支拂つて、高名なる記者を聘した」という。地方新聞とはいえ主筆であつた靈山の給料は低くはなかったと推測できる。しかし、靈山は『山陽新報』主筆の椅子を有森新吉に1899年3月に譲る。

『山陽新報』では、靈山は主に政党政治を批判する政治的な社説の傍ら、旅行記の連載も手掛けた。靈山の旅行には志賀重昂(靈山 1898b)や松永聴剣(靈山 1898c)が同行した。旅行で訪ねた人々には前川虎造(靈山漫筆 1899b)をはじめ、『大坂朝日新聞』の須藤南翠と小川定明、『神戸新聞』の白河鯉洋(靈山漫筆 1899c)などがいた。

靈山は『山陽新報』の漢詩欄「文苑」にもしばしば漢詩を寄せている。私生活でも詩会や文学会に出ており⁴⁴⁾、特に小室重弘(屈山)とは漢詩をきっかけに親しく交際したようである⁴⁵⁾。

1899年10月22日には『山陽新報』一面に「井土經重／今般解雇候也」の社告が出された。同紙面に掲載された「井土靈山を送る」という記事にて靈山がライバル紙の『中國民報』に去ったことがわかる⁴⁶⁾。『中國民報』は1899年の夏「犬養毅氏の紹介により矧川、志賀重昂を聘して主筆とし」ていた(中國民報社 1936: 3)が、志賀は秋には退社してしまう(山陽新聞百二十年史編集委員会 1999: 747)⁴⁷⁾。靈山は志賀のあとをうけて1899年10月22日に主筆として『中國民報』に入社した。郡山(1956: 371)によれば「『中國民報』創刊後、岡山では「岡山日報」を改題した「関西新聞」に小室屈山(重弘)が来たので、これに対し、「中民」は前「山陽」主筆井土靈山一既記一と塚越停春樓とを迎えた」とのことである。

しかし靈山も一年弱の後に主筆の座を退き、1900年9月1日には田岡佐代治(嶺雲)がその後を襲う(山陽新聞百二十年史編集委員会 1999: 747-748)⁴⁸⁾。靈山が主筆辞任と同時に『中國民報』を辞めたかどうかは不明である。

第六期 大阪

岡山に続く靈山の住址は大阪だった⁴⁹⁾。大阪には1902年半ばまでには転居しており、古巣の『大阪毎日新聞』で数年を過ごした⁵⁰⁾。

山陽新聞百二十年史編集委員会(1999: 72)には靈山が『中國民報』を去ったのち「大阪毎日新聞通信部長」となった旨が記されている。しかし『大阪毎日新聞』の社史編纂委員会(1952: 81)には靈山が1902年10月7日の時点で「通信部部員」となって、2面に新たに創設された常設コラム「硯滴」欄を担当していた旨が記されている⁵¹⁾。詳細は不明であるが、少なくとも靈山は『大阪毎日新聞』通信部に属し「硯滴」欄を担当していたようである⁵²⁾。

靈山は大阪では金尾文淵堂において文壇と交わった。『大阪毎日新聞』で薄田「泣菫の旁に席を與へら」れた靈山は「一日の業終りて後、泣菫と共に文淵堂に到り、狂言亂語以て常と爲せり〔…〕曰く菊池幽芳、曰く水谷不倒、曰く平尾不孤、曰く角田浩々歌客、曰く奥村不染〔…〕予此間に醉骨を厠へ、諸子の談論を聴くを以て一の樂と爲」したことを記している（靈山生 1920: 50）。

第七期 東京・下谷

靈山が「予東京に出で、又一賣文生となる」（靈山生 1920: 50）と記すように、靈山はおそらく 1905 年までには東京の操觚界に戻ってきており、下谷区（現在の台東区西部）に居を構えた⁵³⁾。

下谷在住時の靈山の著作は『蒙求通解：選註』（井土・國分 1910）、『李太白詩集：選註』（李・森・井土 1910）、『六雄八將論：註解』（青山・井土 1910）、『蘇東坡詩集』（蘇・頼・井土 1911）、『作詩大成』（井土 1911c）、『杜少陵詩集』（杜・井土 1911）、『ポケット寒山詩：訓註』（寒山・井土・簸川 1911）、『白樂天詩集』（白・町田・井土 1912a）、『續白樂天詩集』（白・町田・井土 1912b）、『選註新譯白樂天詩集』（白・井土・國分 1913）、『新釋白樂天詩集』（白・井土 1913）、『新作詩自在』（井土 1916）などで、漢学・漢文・漢詩関連のものが多い⁵⁴⁾。これらの著作には國分青厓（高胤）、前田默鳳（圓）、森槐南（公泰）、結城蕃堂（琢）、久保天隨（得二）、後藤新平、小松原英太郎、土井香國、磯部彌一郎などの錚々たる面々が題字、序文、装画、英訳などで関わっている⁵⁵⁾。

靈山はこの後巢鴨に転居する頃には漢詩に加えて書にも傾倒していくことになるが、この下谷在住期の 1914 年に既に康有爲の『廣藝舟雙楫』を中村不折と共訳した『六朝書道論』（康・中村・井土 1914）が出版されていることが注目される⁵⁶⁾。靈山と中村不折の交際は長く続き、『十七帖の研究及口譯』（中村 1933）においては靈山が口譯を手伝い⁵⁷⁾、序文も寄せている。

さて、大阪から帰京した靈山は 1907 年には岡山で友人となった小室屈山（重弘）とともに『やまと新聞』にいた⁵⁸⁾。高橋（1967: 362-363）によれば『やまと新聞』での靈山は、後に南画壇の重鎮となり、靈山を後年経済的に支援したという小室翠雲（貞次郎）とも知り合った。両者の交際は数十年も続き⁵⁹⁾、1920 年には共に中国を漫遊した⁶⁰⁾。小室は靈山の臨



写真1 中村不折、井土靈山、横川醉草
（井土 1920: 44）

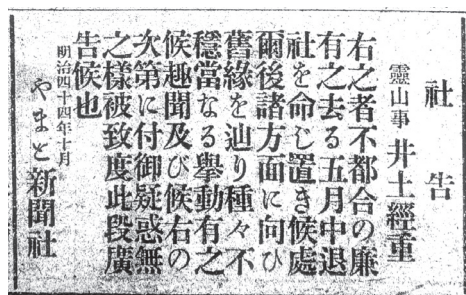


写真2 井土靈山の退社に関する二号活字の社告
(やまと新聞 1911)

により『東京毎日新聞』に入社している⁶³⁾。このとき靈山は55歳だった。おそらく数年のうちに退職したであろう⁶⁴⁾。

靈山は新聞界を退いた。しかし、楽隠居にはならなかった。教育界、官界、そして新聞界を巡った靈山は最後は漢学と詩書画の振興に没頭する。

第八期 東京・巣鴨

靈山は1919年2月28日までに下谷から巣鴨に居を移している⁶⁵⁾。巣鴨が靈山にとっての終の棲家となった。

靈山が巣鴨を拠点にして始めた活動は、詩書画に関する書物や記事の執筆、書画論の翻訳、詩書画や漢学に関する雑誌の編集や発行だった。漢詩関連の著述は『やまと新聞』時代から既に始めていたが、新聞界を退いてからは書画を含む漢学全般に著述と出版活動の範囲を広げた。靈山は次女と長男に先立たれるほど長寿であったので⁶⁶⁾、靈山がこれらの活動に本格的に取り掛かったこの時期、日本において漢詩文は既に衰退期に入っていたが⁶⁷⁾、靈山はこれを意に介さず、私財を投じて漢詩文の振興に邁進した(辻・井土・板垣 2002: 61-62, 75)。

この時期の靈山の著作には「明治大正漢詩史概観」(井土 1929a)のような漢詩関連のものもあるが、著訳書は『草書實習法』(井土 1928)、『書道實習法』(井土 1925b)、『叢書要訣』(井土 1933a)、『和漢五名家千字文集成』(井土 1934)など書道関連のものが多い。

靈山は1916年10月5日に『書道及畫道』を創刊する。これは書画を中心に漢学全般の論文と記事を載せる雑誌であった⁶⁸⁾。創刊当初の『書道及畫道』編輯局は、井土靈山、潘挹青、橋本天巖からなっていたが奥付によればその編輯者は靈山であった。靈山が原稿の採否や依頼を行っており⁶⁹⁾、彼の個性が反映された雑誌だったようである。日本の漢詩文は既に衰退の途に入って久しかったが(齋藤 2013: 103-104)、「書道及畫道の如きは數萬の讀者あり是れ則ち我國斯道の篤學者の殆ど全體を網羅せりと謂ふも過言に非ず」(前田 1917: 24)、「雑誌『書道及畫道』は靈山の創意に成りしものにして斯道の爲に貢獻する所頗る多く、且つ大に成功したる

終も看取っている(南畫鑑賞 1935)。

靈山は1910年においても『やまと新聞』において、4月25日には桜田十八烈士を顕彰する「櫻會」の設立に立ち会ったり(岩崎 1911: 16)、5月7日には「東北記者會」設立において演説をしたりしているが⁶¹⁾、1911年10月にはやまと新聞社長松下軍治と対立して退社する⁶²⁾。

この後、靈山はおそらく『東京毎夕新聞』を経て(南畫鑑賞 1935: 57)、1914年には原敬の推薦

もの也」（香川 1917b: 52）といった記述を信ずるならば大正時代の漢学雑誌としては健闘したようである。この雑誌には靈山自身が多く寄稿しているほか、靈山が手掛けた書画論の邦訳も多く掲載された。目次を見る限り、靈山の邦訳した書画論は以下のようなものだった。董其昌『畫眼』、阮元『南北書派論』、姜夔（姜白石）『續書譜』、曾國藩『論書』、湯貽汾『畫筌析覽』、朱和羹『臨池心解』、包世臣『安吳論書』、孫虔禮『書譜』、唐岱『繪事發微』（宮澤 2014: 69-103）。『書道及畫道』は1922年1月からは『東洋藝術』と改題して継続するが、その後どれくらいの期間発行が続いたかは不明である。

靈山はその後1927年3月に新たに雑誌『詩書畫』を創刊する。この頃、紀成柯庭とともに1927年発行の『宋元明清書畫名賢詳傳』（山本・紀成 1927）の著述に協力しているが、生活は苦しかったようである（杉村 1996: 22-23）。これは『詩書畫』に蓄えを注ぎ込んでいた（辻・井土・板垣 2002: 61-62, 75）からかもしれない。『詩書畫』も何号続いたかは不明である。南畫鑑賞會（1935）には靈山について「幾何もなく南畫鑑賞會の創設に際し、之を棄てて本會のため盡瘁せられたり」（引用中の「之」は『詩書畫』を指す）と書かれていることから、南畫鑑賞會が創立された1932年（南畫鑑賞 1935: 58）までには廃刊したと思われる⁷⁰⁾。

靈山は同人雑誌『昭和詩文』編纂顧問も務めていたが、資料から確認できる限りでは遅くとも1929年1月には始め、少なくとも1933年7月までは続けている⁷¹⁾。

巢鴨在住の時期は中国の人との交際が増えたようでもある。自ら記しているものとしては「茲に吾輩の交際して居る人で、目下我が國に滯留して居る何鳴鐸⁷²⁾といふ人がある」（井土 1917: 73）程度しか見当たらないが、中華料理屋の主人に漢詩を教えたりもし⁷³⁾、これらに加えて、汪亞塵（汪 2014）、張大千（万 2017）、高希舜（朱 2015）、吳昌碩（松村 2016: 204）⁷⁴⁾などの中国の詩書画家たちと交際した⁷⁵⁾。

靈山は1935年に77歳で没した。『東京朝日新聞』1935年7月23日東京版夕刊2面（東京朝日新聞 1935）は靈山の逝去を報じて曰く「漢學者で明治時代の操觚界に知られた豊島區西巢鴨二ノ二〇四〇井土靈山氏は病氣療養中二十二日午前零時五分自宅で死去した、享年七十七、告別式は来る二十四日午後二時から三時まで小石川區關口町養國寺で行はれる、翁は福島縣の出身、詩書畫の大家として知られてゐた」。

おわりに

本稿では靈山の経歴と事績をまとめた。しかし、内藤湖南文庫に所蔵の書簡、『相馬郷』や『やまと新聞』などの雑誌新聞に掲載された記事や、海外の資料にまでは調査が行き届かなかった。それらについては今後の調査に俟つところが多い。

注

- 1) 本稿作成にあたって、秋田県立図書館サービス班、井土秀雄氏、岡山県立図書館サービス第二課郷土資料班、若松丈太郎氏に多大なご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表す次第である。
- 2) 井土 (1936) の結城蕃堂 (琢) による「序」より抜粋。
- 3) 猪口 (1980: 41-43) を参照。
- 4) 例えば富海 (1899) や書藝 (1934) を参照。
- 5) 自由民権家には新聞人から政治家へという経歴を辿ったものが少なくない (比屋根 1982、稲田 2009、等を参照)。議員当選歴を持つ中江兆民、栗原亮一、島田三郎、植木枝盛、末廣鐵腸 (重恭) などの民権家も在野では『東雲新聞』『毎日新聞』『朝野新聞』などの新聞社で言論活動に携わった。「新聞と演説での言論活動で活躍して、後半生は政党政治家となる」ことは「民権家の歩むひとつのパターンを示すもの」 (稲田 2009: 99) であった。その一方で、新聞人ではあったが、政治家にはならなかった、もしくは落選に遭って政治から離れていった民権家たちもいた。桐原捨三 (奥 1999) や、稲田 (2009: 99-100) がその経歴を記している久松義典もその一例といえる。
- 6) 福岡・秋月兩藩で働いた儒者の井土周磐^{しゅうばん}／井土学圃^{がくぼ}などが好例である。彼の養親であった福岡藩儒井土南山や秋月の藩校であった稽古館に福岡から招かれたとの記述がある井土佐助 (福岡縣廳庶務課別室史料編纂所 1948: 4) もその例に含められるかもしれない。
- 7) 「靈山」の号は井土・箕輪・小崎 (1896) の「自序」で用いられているほか、堺 (1970: 120) に1895年に『實業新聞』に「古顔の記者として、硬派の井土靈山君」がいたことが記されていることから、遅くとも1890年代中頃には用いられていたようである。靈山が未だ和田姓であった頃には「馬陵」なる号を用いたこともあったようで、彼が25歳の時にこの号を用いている例である跋文が久米 (1886) に見つかる (若松 2010: 169)。
- 8) 帰農した和田祥重は1889年に『農業要録』 (和田 1889) を出版している。錦織積清 (晩香) の『晚香詩文鈔』 (錦織 1885) においてこの書物についての言及がなされているので、出版の数年前にはその原稿は存在していたようである。
- 9) 福島県 (1964: 908) 「福島部通信委員住所氏名ヲ問フ」との問いに対しての平島松尾の答の中に「行方郡原町和田繼重^{つぐしげ}」とある。
- 10) 「東山の青春を一瞥して其夜三條橋畔の旅舎紙菊屋に投ず此紙菊屋といふは往年予が舊藩主相馬子爵の投宿されし家にて予は當時京都に出遊にて子爵を訪ふこと數回爲めに […]」 (靈山漫筆 1899a)
- 11) 『昭和文人名鑑』の「井土經重」の項の「師承」欄には「詩 國分青厓／畫 長田雲堂」と記されている (川口 1929: 3)。
- 12) 現行の『毎日新聞』とは系譜上の関連はない。ただし靈山は現在の『毎日新聞』につながる『大阪毎日新聞』にも在籍している。
- 13) 『毎日新聞』という略称が『東京横濱毎日新聞』を指すことはよくあったことで、『昭和文人名鑑』での記述における『毎日新聞』が『東京横濱毎日新聞』を指している (ようである) こと自体は奇異ではない。例えば「沼間が毎日新聞を擁して東京の文壇に出づるや、福地は一敵國を得たるの感ありと稱して […]」 (石川 1901: 41) という記述における『毎日新聞』は未だ『東京横濱毎日新聞』であった頃の同紙を指しているし、当の『東京横濱毎日新聞』も1882年から1883年ごろの紙面で社説にあたる部分の見出し部に「毎日新聞」と記し「雜報」などと区別していた。
- 14) ただし、この追悼記事における記述には誤りがある。1882年から1885年の間島田三郎は『東京横濱毎日新聞』では主筆ではあっても社長ではなく「島田三郎氏の經營に係る東京横濱毎日新聞」という表現は事実と反する。実は後述するように、靈山は1895年以降に、島田三郎が社長であった時期の『毎日新聞』にも在籍する。この記述は1882年から1885年の間に存在した、靈山の『東京横濱毎日新聞』での勤務と、1895年以降の『毎日新聞』における勤務を混同したのもかもしれない。島田は1874年に翻訳記者として『横濱毎日新聞』に入り、その後官界を経て、靈山が原町を離れる1年前の1881年に沼間守一社長の『東京横濱毎日新聞』に入社、主筆となっている (久保田 1930: 242-251)。島田が同紙の社長となるのは改題後『毎日新聞』となった後の1894年のことである (門奈 1993: 6)。

- 15) 靈山が福島で既に沼間の知遇を得ており、それを頼りに『東京横濱毎日新聞』での職を得た可能性も皆無ではない。若松（2016b）を参照のこと。
- 16) 講義録『法理學講義』は1885年から1888年の間に17号にわたって出版されているが、その合本における「和田經重筆記」の表記から1885年に最初の4回の講義の筆録を靈山が担当したことがわかる（江木 1885-1888: 1, 39, 81, 123）。1892年に再版されたこの講義録の合巻には1885年1月付の「筆者」による例言が付されており（江木 1892: 1-2）、ここから靈山が1885年1月から既に講義筆録を始めていたことがわかる。
- 17) 靈山は『將來之東北』（半谷 1906: 9-18）では島田三郎や原敬による談話を口述筆記しているおり、半谷清壽の原稿の口述筆記もしていたようである（若松 2002: 35）。水野龍著となっている『南米渡航案内』（水野 1906）も筆記したようで「予水野龍の爲に『南米ブラジル案内記』を草し了る」（靈山生 1920: 50）と自ら記している。（靈山は当時「題南米渡航指針十首」なる七言詩も作っている（井土 1907a）。）
- 18) 辻・井土・板垣（2002: 8）によれば靈山は「明治十八年、下宿していた麻布区我善坊町の井土すみと結婚し、「井土」と改姓した」とのことである。
- 19) 分籍は徴兵忌避を目的としたものだったかもしれない。靈山の父和田祥重は1889年においても「福島縣士族」であった（和田 1889: 奥付）。
- 20) 井土家の菩提寺である養国寺は文京区にあるので、井土家は定府であったのかもしれない。井土家の墓石には「筑前秋月藩／井土七郎源義之墓」（「義」は義に似た略字体）と記されている。その墓石と背中合わせに「井土梅子／大正三年建之」と判読できる文字が側面に彫られた「基幼童子」の墓石もあるが、両墓石の関連は不明である。
- 21) 小川・大倉・松平・井土（1891: 奥付）から1891年3月24日前後においても我善坊町にいたことがわかる。
- 22) 「警察講義録／教官 井、ヘーン 講述／譯官 湯目補隆 口譯／○第一回明治十八年四月廿一日 井土經重 筆記」（ヘーン・湯目・井土 1886: 1）。1885年4月28日には警官練習所で刑法を教えた高木豊三の講義も靈山によって筆録されている（高木・井土 1886: 1）。
- 23) 警官練習所は1889年3月末に廃止されたが、1888年12月10日発行の同所の職員録に井土經重の名がある（高橋 1960: 53-54）ことからこの推測ができる。
- 24) 高橋（1960: 53）所収の警官練習所職員録に「判任官九等 井上經重^(ママ)」の記載がある（89頁と93頁には正しく「井土經重」と表記されている）。なお、同所の外国人教師の手当は400円から500円であったらしい（高橋 1960: 23-24）。
- 25) 1886年6月刊行の『警察講義録』の緒言（ヘーン・湯目・井土 1886: 1-3）に警官練習所について「當所特ニ筆記主任ヲ置キ以テ日々教官ノ講義ヲ筆記セシメ」とあり、同書の講義録本編に「井土經重 筆記」と記載があることからこれが了解される。
- 26) 受業生は全国から選抜された優等生から成っており「受業生として選抜されたものは、官立大学に入るのと同様に考へられ、非常の栄冠を獲得せるものと見られてゐた」（高橋 1960: 54-55, 97）。
- 27) 警官練習所が廃止された2年後の1891年、靈山は『日本民法註釋』（小川・大倉・松平・井土 1891）に共著者として参加しているが、その後は法律関連の文章は書いても（井土 1909）本を著すことは無かった。一方、さらに2年後の1893年には初めて漢籍に関わる出版物『纂註 正續文章軌範評林』（若林・井土 1893）に校閲で関わっている。しかし、これを除いては靈山の麻布期の著作は漢学と直接には関わらない。
- 28) 江木は「藩立・岩国学校で英語を学び、明治8年東京に出て東京英語学校に入り」（七戸 2010: 56）島田も「青年期を米人宣教師 S. R. ブラウンの英語塾で過ご」（門奈 1993: 5-6）し、『横濱毎日新聞』で翻訳記者も務めた「英語人材」であったので、英書の邦訳への序文を頼むには適当であっただろう。
- 29) 靈山（1898b）では英語の警句を引用しているほか、靈山が担当した新聞コラム「硯滴」（大阪毎日新聞 1902）では、イーストレキ博士の言葉を紹介して「〔…〕番頭が名刺様のもの／を持ち來る之を見れば Beautiful Boys and Girls として／あつて〔…〕」と記し、井土（1907b）では「ハーミット、キングダム」を「仙人國」と訳している。
- 30) 一方で靈山は久米金彌の著作『高等警察論』（久米 1886）には校訂や跋の提供で関わり、発行人ともなっ

ている。

- 31) 後藤は1888年に警官練習所で衛生法を講じている(高橋1960: 162-166)。高橋(1967: 362-363)によると靈山は「後藤新平に可愛がられ、政界出馬を再三すすめられたが辞退して生涯記者生活で通した」。奥州市後藤新平記念館(2009)には知人の紹介状などの靈山からの書翰が複数収録されている。後藤はまた靈山の著書に題字や題詩も寄せている。
- 32) 岡本(1925)は「一體銀座通りは新聞街で、今のライオンの角の處に島田三郎さんが社長の毎日が有り山崎洋服店の方が中央手前角の服部さんのところが朝野新聞、こつちの角が自由黨の新聞、それから東京日日で、殆ど四ツ角が新聞社でかたまつてをりました。京橋の方へゆくと讀賣、報知は三十間堀の裏通に、時事はいまと同じですが〔…〕」と記している。
- 33) 1896年1月1日発行の自著(井土・箕輪・小崎1896)の奥付には京橋区の住所が印刷されているので、1895年以前の時点での転居ということになる。靈山が後に勤める『毎日新聞』も1886年5月1日から京橋区尾張町新地7番地に移転してきていた(毎日新聞1886)。
- 34) 東京朝日新聞(1894)には靈山は「井上經重」^(マ)として登場する。
- 35) 堺(1970: 120)によれば「実業新聞は、たしか改進黨のあとを継いだもので、社は京橋南鞘(みなみさや)町にあった」。『改進黨』と『實業新聞』ではその所在地も京橋南鞘町で共通している。どちらにも靈山と桐原捨三が勤めており(奥1999: 39、堺1970: 120)、両者とも後に『大阪毎日新聞』に移る(奥1999)。
- 36) 靈山は1896年に毎日新聞社にいた。これは1899年1月3日付の『山陽新報』における記名記事で「回顧すれば今より三年前〔…〕當時予東京の毎日新聞社に在り」と靈山が自ら記していることからわかる。また、山陽新聞百二十年史編集委員会(1999: 69)は靈山が「大阪毎日などにいた」と記している。
- 37) この「序」が書かれた1916年には『毎日新聞』は『東京毎日新聞』に改題(1906年)していた。
- 38) 結城蕃堂(琢)は靈山の著書『新作詞自在』(井土1916)(のちに改変を経て『新漢詩作法』)に寄せた「序」において「余與靈山締交。二十餘年。」と書いているが、その「序」には「大正丙申」(1916年)と日付が入っているので、そこから「二十餘年」前を逆算すれば1896年を少しさかのぼるころに靈山と結城は知り合ったことになる。靈山は結城の自家版(結城・井土1915)の補輯も手掛けている。
- 39) このリストからは「東京毎夕」の前に入るべき『やまと新聞』が抜けている。これは靈山がやまと新聞社社長と対立して辞職したためかもしれない。
- 40) 赤松(1948: 82)は「同會は役員として評議員三十名幹事三名とを置いた」と記し、その評議員リストの筆頭に「井上經重」^(マ)と記している。「社會問題研究會は、毎月一回東京新橋新着町の開花亭に會合」した(赤松1948: 83)。社會主義を奉じるものたちの集まりではなく「社會問題に興味有するを學者及紳士の研究的集會であつた」(赤松1948: 90)。
- 41) 1897年から靈山が岡山に向かう1898年までの時期の『大阪毎日新聞』の経営には本山彦一が携わっており、おそらくこの縁がもとで靈山は本山の藤田組が数百万円を投じた岡山県児島湾干拓事業(三田商業研究會1909: 919-920)について『児島灣開墾史』(井土1902)を1902年に著すことになる。
- 42) 『將來之東北』(半谷1906: 15)に「著者は友人井土經重氏を介して原内相に序文を乞ひたる〔…〕」とある。1914年に55歳になった靈山は『東京毎日新聞』に原敬の推薦により入社している(若松2016d)。靈山の子孫によれば、戦争で燃えてしまったが、靈山が(その名をハクブンさんと字音読みしていたという)伊藤博文と写った写真があったという。このつながりも原敬と立憲政友会を通したものかもしれない。靈山には犬養毅とも少なくとも面識及び手紙のやり取りがあった(井土1925a参照)。靈山の交際範囲は広く、この他にも皇太后宮大夫の香川敬三(井土1911a)や内藤湖南(虎次郎)などとの交渉があった(内藤2009、関西大学図書館2013)。
- 43) 『山陽新報』について詳しくは小野(2008)を参照。山陽新聞百二十年史編集委員会(1999: 69)には『山陽新報』の主筆について「三十一年八月〔…〕井土經重(靈山)に代わった。井土は漢学の造けいが深く、大阪毎日などにいた。三十二年三月、ドイツから帰った有森新吉が主筆に就任した」などと記されている。
- 44) 「岡山文學會」にも出席している(山陽新報1898)。
- 45) 「君嘗て岡山日報の主筆として、筆を載せて岡山に来る、余偶乏を山陽新報の主筆に承けて同地に在り、

- 當時岡山に詩會あり、藤波千溪氏牛耳を執る、時偶中秋に近く詩會を開き、君と余とを外來の一詩客として招く」（井土 1908: 3）。「屈山、靈山が詩酒徴逐したことは屈山の著書に見える」（郡山 1956: 371）。小室は1908年に死亡し、靈山はその遺骸の解剖に親戚代表として立ち会っている（井土 1908: 3）。
- 46) 山陽新聞百二十年史編集委員会（1999: 69）には「井土は三十二年十月、中民主筆に転じ […]」などと記されている。同書（1999: 745-746）の年表には1899年10月22日に『中國民報』に「山陽新報前主筆井土經重（靈山）主筆として入社」との記述がある。
- 47) 靈山は『山陽新報』在籍時に志賀重昂（矧川）と関谷疊を訪れている（靈山 1898b）。
- 48) 『中國民報社誌』（中國民報社 1936: 3）によれば靈山は1900年に主筆に就任し、同年のうちに田岡佐代治（嶺雲）がその後任となった。
- 49) 「井土經重君、嘗て岡山に在り […] 兒島灣開墾の顛末を見聞し、後、居を大阪に轉ずるに及び、之れが編著に従事し […]」（本山 1937: 150-151）。
- 50) 1902年5月15日に発行された靈山の著書『兒島灣開墾史』（井土 1902）中の序文には「辛丑晩秋於浪華僑居」とあるので、1902年半ばまでには大阪に移動していたことになる。若松（2002: 33）によると、1903年3月24日付の半谷清壽の日記に「大阪毎日新聞社の記者井土經重氏へ端書を差せり」という記述があり、靈山の『兒島灣開墾史附録：開墾工事方法』（井土 1903）は1903年5月15日に大阪で出版されており、その序文には「第五回内國勸業博覽會開會式前一日大阪に於て」との記述が見える。つまり、1903年までは靈山は大阪に住んでいた。靈山が後に「予嘗て大阪毎日社に一食客たり」「居ること數年、予毎日社より放逐され、破帽斷衫、行李飄然、逢阪の關路を跡にし […] 東の住居へと還る」（靈山生 1920: 50）と書いているところを見ると、大阪では數年を過ごしたらしい。
- 51) 「三十五年十月七日から、第二面の下欄に「硯滴」欄を創設した。文章は口語体、社説とは趣きを異にした短評で、初期の執筆者は井土靈山氏であった。井土氏は通信部部員で漢詩人であった。」（社史編集委員会 1952: 81）「硯滴」欄を2面に創設、文章は一部口語体で初期の筆者は井土經重（靈山）」（毎日新聞社 2002b: 562）。
- 52) 靈山が『中國民報』主筆を辞めて4か月ほどが経った1901年1月には、1900年の11月22日に『大阪毎日新聞』に編集総理として入社したばかり（毎日新聞社 2002a: 292）だった小松原英太郎が「時事新報から土屋元作（大夢）氏を迎えて通信部長とする」（社史編集委員会 1952: 79）。靈山はといえば1902年10月7日の時点では「通信部部員」となって、2面に新たに創設された常設コラム「硯滴」欄を担当している。靈山は『中國民報』を主筆辞任と同時に1900年8月で退社し、1900年中に通信部長として『大阪毎日新聞』に入ったが、新社長が連れてきた記者が通信部長になったため1901年1月に通信部部員に降格されたのかもしれない。あるいは通信部部員として『大阪毎日新聞』に入り、1902年以降に通信部長に昇格したのかもしれない。前述の土屋元作は1902年1月2日に「小松原社長と対立し退社」（毎日新聞社 2002b: 562）している。小松原英太郎は岡山出身で1901年12月から1903年11月の辞任時まで『大阪毎日新聞』の社長を務め（毎日新聞社 2002a: 293-294、稲吉 2015: 117）、1878年から1879年にかけては『山陽新報』の発刊に尽力した人物である（郡山 1956: 365、小松原英太郎君伝記編纂実行委員会 1988: 282）。
- 53) 1905年発行の靈山の著書『滿洲富籤策』の出版地は東京である。1906年7月26日消印付きの後藤新平宛書簡に書かれた靈山の住所は「下谷區入谷町百番地」だが、1907年4月9日の消印がある後藤新平宛書簡では住所が「下谷區中根岸町十二番地」に変わっている。
- 54) ただし靈山はこれらの著作に先立って、直接に漢詩を主題とはしていない『大筥根山』（井土 1909）という新書大の本も著している。これには「国立公園設置運動に関する看過しがたい史料と認められる」（針ヶ谷 1984: 14）「箱根國園論」が収められている。『大筥根山』は中村不折が表紙画、前田默鳳が題字、後藤新平が題詩、磯部彌一郎が英語序文を寄せている点でも注目される。
- 55) これらの面々の多くは數年後に靈山が創刊する雑誌『書道及畫道』にも寄稿する。
- 56) 『六朝書道論』は題字を宗星石（重望）が揮毫している。
- 57) 「口譯は私意に出でたのであるが、友人井土靈山翁の援助を得るコトが多かつた。コゝに翁の好意を感謝するのである。」（中村 1933: 例言）。
- 58) 「明治四十年春 […] 當時のやまと新聞は […] 代議士として勇名を馳せた斯界の老将小室屈山氏や、井土經重氏（靈山）も居られた」（松井 1929: 265）「少年から文名を馳せて、變つた天才と稱せられた正岡

- 藝陽氏も居られた、小川煙村氏も居られた、漢文家たる井上^(ママ)靈山氏の外に、俳句家として、石楠派を創立した白田亞浪氏も居られた、殊に漢詩に巧な寺岡鏡谷氏（彌三郎）などは早くから営業部長として、創業の巧苦を積み來られた〔…〕」（松井^(ママ) 1929: 266）。
- 59) 「辛酉之夏浩然吟友宴寧小室翠雲井上靈山余有事不能趣賦此寄懷」（杉原 1921: 見開き 4 頁目）や井土（1932）を参照のこと。
- 60) 「余は嘗て泰山に登つて見た」（井土 1933b: 29）と書いており、後藤朝太郎等と共に廬山や六和塔などを訪れている（後藤 1923: 6, 133）ので、少なくとも山東省、江西省、浙江省は訪れたようである。
- 61) 「やまと社井土靈山氏其他の演説ありたり」（東京朝日新聞 1910）。
- 62) この顔末は井土（1911a, b）に詳しい。井土（1911a）からは靈山と坂崎斌（紫瀾）や岩崎英重（秋月鏡川）、香川皇后太夫、田中光顯などとの関係が窺えて興味深い。
- 63) 若松（2016d）によれば1914年7月23日付の『福島日日新聞』に「井上^(ママ)經重氏（略）前内務大臣原敬氏の推薦にて東京毎日新聞社に入社せり」との記述があるという。1914年6月1日発行（5月25日印刷・納本）の『早稲田文學』103号に既に靈山の『東京毎日』に掲載の記名記事「大博の『書』を評す」が挙げられている（早稲田文學〔第二次〕1914: 11）ので、靈山の『東京毎日新聞』勤務は遅くとも5月には始まっていたようである。
- 64) 1916年3月5日には平日に遠出をして梅見に行っていることから、1916年には靈山は既に勤め人ではなかったと推測できる。「南多摩町の香雪園、〔…〕園主土田政次郎君の招待あり、詩人結城蕃堂氏東道の主人となり三日東京を發するもの一行二十餘人、〔…〕三浦英蘭、有澤紅舟、〔…〕大町桂月、井土靈山など頻りに達筆を揮ふ」（一記者 1916）。前述した、後藤新平を案内しての九州各地の「游履」（南畫鑑賞 1925: 57）もこの時期でないかと推測できる。しかし後藤は頻繁に九州を訪れており、現状ではこれがいっつのことなのかはわからない。（九州鉄道百年祭実行委員会・百年史編纂部会（1989: 83）と御厨（2007: 112, 128, 130）参照。）
- 65) 1919年2月28日付の後藤新平宛書簡に記された書簡に記載された靈山の住所が「市外、巢鴨宮仲二〇四〇」となっている（奥州市後藤新平記念館 2009）ことから、靈山が還暦を待たず下谷から巢鴨に引っ越したことがわかる。
- 66) 靈山の二女きみと長男久はそれぞれ1917年7月と1926年6月に死亡している。
- 67) 日本漢詩文の衰退を嘆いたり、その優れた点を説くこと自体は、例えば池澤（2013）の記述にも見られるように、江木衷（冷灰）など明治大正期の他の日本漢詩作家にも見られた態度である。ただ、その態度は一般の共感を得ていたとは言いがたい。『國學院雑誌』には靈山の『やまと新聞』に書いたと思しき「漢學の前途」なる記事について以下のように記されている（國學院雑誌 1910: 95）。「○漢學の前途（大和一靈山）東洋の文柄を握る爲に漢文を起すといふので、前途漢文が有望だといふ無邪氣な論であるが、「東洋文學は之を西洋に知らしむると同時に又西洋文學を東洋民族に知らしむる必要あり。この兩面の任務は漢學の力に待つ所最も多からざるを得ず」などは愚論である。」
- 68) 『書道及畫道』の発行所であった書道及畫道社は展覧会も催した（東京朝日新聞 1922）。
- 69) 「〔紙面の割愛を〕御許容になるとならぬは靈山先生に御任せします（〔 〕内筆者）」（天風生 1917: 52）「寄稿すべしと催促するが靈山一流の骨法なり」（香川 1917a: 41）などの記述からこれがわかる。
- 70) 靈山は南畫鑑賞會創設時からの顧問であった。
- 71) 『昭和詩文』各号の奥付に靈山が編纂顧問として記録されていることからわかる。同誌には靈山自らも少なくとも一首を投稿している（井土 1929b）。
- 72) 何鳴鐸は『孫文・日本關係人名録』（孫文記念館 2012）の「孫文關係在日華僑一覽表（1913年）」内の国民党東京支部職員・黨員リストにその名が見える。
- 73) 「漢詩を教えていた。お弟子さんに神田神保町辺りの、大きな支那料理屋のご主人がいて、纏足の夫人を連れて家へよく見えた。お土産にいつも食べきれないほど月餅^(ママ)を持ってきた」（辻・井土・板垣 2002: 75）。
- 74) 黄・張・趙（1995）や李（2016）に呉に寄せた靈山の漢詩が採録されている。呉（1990）には靈山は登場しないようである。
- 75) 靈山は記者時代には清国や中華民國といった「国」に対しても、一定の関心はあり、若松（2016c）によ

れば「支那」をもっと知るべきだとしたり、康有爲の議院論を論じたり（靈山 1898a）、「滿洲大學」の設立を唱えたりしていた（井土 1905: 25-30）が、新聞界を退いた後は、「国」への言及は少ない。「要するに日本人は書も畫もその他の物も支那のものを模倣してゐるんですね、一寸變つたものがあるなと思つても皆請負です」と述べている（書藝 1934: 28）ように詩書畫の源としての「支那」には畏敬の念を抱いていたようである。

参考文献

- 青山延光原著・井土靈山譯註 1910『六雄八將論』崇文館
 赤松克麿 1948『日本社會運動の歴史的研究』勞務行政研究所
 石川安次郎 1901『沼間守一』毎日新聞社
 池澤滋子 2013「漢詩人としての江木衷：蘇軾「聚星堂雪」の次韻詩を中心に」『人文研紀要』第77号1-28頁
 磯部四郎講述・井土經重筆記 1888『日本刑法講義筆記』信山社
 磯部四郎著・井土經重筆記 1889a『現行日本治罪法講義 上巻』博聞社
 磯部四郎著・井土經重筆記 1889b『現行日本治罪法講義 下巻』博聞社
 一記者 1916「梅花飯 町田の梅見」『讀賣新聞』1916年3月5日朝刊5面
 井土經重 1889『相馬時事管見：一名・選舉人心得』井土經重
 井土經重 1902『兒島灣開墾史』金尾文淵堂書店
 井土經重 1903『兒島灣開墾史附錄：開墾工事方法』岡島書店
 井土經重 1905『滿洲富籤策』清水書店
 井土經重 1908「題詞」小室屈山『自然と社會：文範』博文館 1-10頁
 井土經重 1909『大筥根山』丸山舎書籍部
 井土經重・箕輪勝・小崎文次郎 1896『征清戰死者列傳』國光社
 井土經重著述・磯部四郎校訂 1889『大日本帝國憲法註釋 附議院法案議院議員選舉法會計法貴族院令』永昌堂
 井土靈山 1899「小生事山陽新報社を退く此段辱知諸君に告く／自今御書簡は岡山市二日市町卅番邸宛に願上候」『山陽新報』1899年10月24日6面
 井土靈山 1907a「題南米渡航指針十首」『日本辯護士協會錄事』105号85頁
 井土靈山 1907b「書讀む可からず」『成蹊』3号2頁
 井土靈山 1909「司法問題」『日本辯護士協會錄事』136号64-75頁
 井土靈山 1911a「新聞界の咄々怪事」『大國民』41号139-150頁
 井土靈山 1911b「やまと新聞の滅亡」『大國民』42号56-57頁
 井土靈山 1911c『作詩大成』崇文館
 井土靈山 1916『新作詩自在』二松堂書店
 井土靈山 1917「初學習字法」『書道及畫道』2巻6号73-75頁
 井土靈山 1920「落款の話」『書道及畫道』5巻5号41-48頁
 井土靈山 1925a「惡札の裁判—木堂先生の屑籠埋葬—」『木堂雜誌』3号34-35頁
 井土靈山 1925b『書畫骨董叢書第七卷 書道實習法（草書及假名）』書畫骨董叢書刊行會
 井土靈山 1927「詩人としての頼山陽」『詩書畫』創刊号30-32頁
 井土靈山 1928『草書實習法』二松堂
 井土靈山 1929a「明治大正漢詩史概観」『現代日本文學全集 第三十七篇 現代日本詩集・現代日本漢詩集』改造社 589-595頁
 井土靈山 1929b「調碧堂」『昭和詩文』19巻7号22頁
 井土靈山 1933a『草書要訣』不朽社
 井土靈山 1933b「擘窠の名人岡本碧崑」『書道』2巻10号29-32頁
 井土靈山 1934『和漢五名家千字文集成』弘文社
 井土靈山 1936『新漢詩作法第六版』光文館

- 井土靈山撰 1932『歸雲集』井土靈山
 井土靈山選註・國分青厓校閲 1910『蒙求通解：選註』崇文館
 稲田雅洋 2009『自由民権運動の系譜：近代日本の言論の力』吉川弘文館
 稲吉晃 2015「実業新聞の市政論：大阪築港をめぐる『大阪毎日』と『大阪朝日』」『法政理論』47巻3・4号
 111-144頁
 猪口篤志 1980『日本漢詩鑑賞辞典』角川書店
 岩崎英重 1911「櫻田烈士五十年祭典の記」岩崎英重『櫻田義舉録』吉川弘文館 1-8頁
 江木衷 1885-1888『法理學講義 第1-17号（警視廳藏版）』博聞社
 江木衷 1892『法理學講義合卷（警視廳藏版）』博聞社
 遠藤興一 2007「執筆活動からみた田川大吉郎」『研究所年報』37号3-31頁
 汪亚尘 2014「四十自述」『中国书画报』5期3版
 奥州市後藤新平記念館 2009『DVD-ROM 版後藤新平書翰集』雄松堂
 大阪毎日新聞 1902「硯滴」1902年10月9日2面
 岡本綺堂 1925「新聞記者時代「東京日日」へ入社への追憶」『東京日日新聞』1925年12月6日4面
 小川鐵吉・大倉鈕藏・松平信英・井土經重註釋 1891『日本民法註釋 財産取得編 債權擔保編』中村與右衛門
 奥武則 1999「桐原捨三とその時代：「大衆新聞」の誕生・その前夜」『昭和女子大学文化史研究』7号31-54頁
 小野進 1995「賃金決定理論と明治・大正期の労働「市場」」『立命館経済学』44巻3号412-462頁
 小野秀雄 1925『大阪毎日新聞社史』大阪毎日新聞社[ほか]
 小野増平 2008「草創期の中国地方の新聞」『広島経済大学研究論集』31巻2号69-79頁
 香川魁庵 1917a「井土靈山に寄す」『書道及畫道』2巻9号41-43頁
 香川魁庵 1917b「鯨乎目高乎」『書道及畫道』2巻11号52-55頁
 川口壽 1929『昭和文人名鑑』大東美術振興會出版部
 寒山原著・井土靈山校閲・簾川白瀉編 1911『ポケット寒山詩：訓註』二松堂
 関西大学図書館 2013『関西大学所蔵内藤文庫17：湖南宛書簡』関西大学図書館 <http://hdl.handle.net/10112/10443> 最終閲覧日2018.04.25.
 九州鉄道百年祭実行委員会・百年史編纂部会編 1989『鉄輪の轟き：九州の鉄道100年記念誌』九州旅客鉄道
 久保田辰彦編 1930『廿一大先覺記者傳』大阪毎日新聞社
 久米金彌 1886『高等警察論』井土經重
 黄铁城・张明诚・赵鹤龄编注 1995『中日诗谊』陕西人民出版社
 呉長郷著・河内利治・北川博邦共訳 1990『わが祖父呉昌碩』東方書店
 康有爲著・中村不折・井土靈山共譯 1914『六朝書道論』二松堂書店
 幸徳秋水 1970「社會問題研究会に就て」幸徳秋水全集編纂委員会編『幸徳秋水全集第一巻』明治文献 269-271頁
 郡山辰巳 1956「岡山県新聞史」日本新聞協会編『地方別日本新聞史』日本新聞協会 365-372頁
 國學院雜誌 1910「新聞雜誌管見」1910年7月号90-96頁
 後藤朝太郎 1923『おもしろい支那の風俗』大阪屋號書店
 小松原英太郎君伝記編纂実行委員会 1988『小松原英太郎君事略』大空社
 齋藤文俊 2013「近代日本漢文を読む」沖森卓也編著『漢文資料を読む』朝倉書店 102-108頁
 堺利彦 1970『堺利彦全集第六巻』法律文化社
 山陽新聞百二十年史編纂委員会 1999『山陽新聞百二十年史』山陽新聞社
 山陽新報 1898「岡山文學會」1898年11月25日1面
 七戸克彦 2010「ロー・アングル 現行民法典を創った人びと15査定委員(9)江木衷(10)穂積八束 外伝(11)兄弟」『法学セミナー』55巻7号56-58頁
 柴田郡教育會編輯 1925『柴田郡誌』柴田郡教育會
 社史編纂委員会 1952『毎日新聞七十年』毎日新聞社
 朱京生 2015「尘封在档案里的历史与人生(上)——高希舜的交游与南京美术专科学校的创办」『荣宝斋』2015年
 11期248-259頁 <http://www.rongbaozhai.cn/index.php?m=shukan&a=show&shukanid=16&modelid=28&sho>

- wid=113 最終閲覧日2018.04.13.
- 書藝 1934「明治元勳の書を語る（出席者）井土靈山 後藤朝太郎 吉川英治 藤原楚水 梅園方竹 渡邊森衛」
1934年4巻6号23-29頁
- スウィントン、ウエルリウム（斯氏）・井土經重譯・久米金彌訂 1886『斯氏萬國史鑑 第一冊（東方古代ノ帝王國）』淡海書屋
- 杉原謙 1925『在連古存二篇』讀我詩屋
- 杉村邦彦 1996「内藤湖南と山本二峯」『書学書道史研究』6号17-36頁
- 蘇軾原著・頼山陽選評・井土靈山註解 1911『選註蘇東坡詩集』崇文館
- 孫文記念館 2012「東京支部職員・党員」孫文記念館編『孫文・日本関係人名録 増訂版』孫中山記念会 http://sonbun.or.jp/jp/index.php?option=com_content&task=view&id=82 最終閲覧日2018.04.23.
- 高木豊三述・井土經重記 1886『刑法講義録』博聞社
- 高橋哲夫 1967『福島民権家列伝』福島民報社
- 高橋雄豺 1960『明治警察史研究第一巻』令文社
- 中國民報社 1936『中國民報社誌』中國民報社
- 辻花子・井土一雄・板垣葉子調査・資料蒐集・編集 2002『時代を奔る人、祖父井土靈山を偲んで』井土一雄
- 土屋礼子 2002『大衆紙の源流：明治期小新聞の研究』世界思想社
- 天風生 1917「硯の話」『書道及畫道』2巻8号52-56頁
- 杜甫原著・井土靈山選註 1911『杜少陵詩集』崇文館
- 東京朝日新聞 1894「誣告事件第十六回公判」1894年4月17日東京版朝刊1面
- 東京朝日新聞 1896「青年同志俱樂部」1896年12月1日東京版朝刊1面
- 東京朝日新聞 1905「時局雜俎」1905年6月21日東京版朝刊5面
- 東京朝日新聞 1910「東北記者會成る」1910年5月9日東京版朝刊3面
- 東京朝日新聞 1922「書道及畫道社／支那の古書畫展觀24～25」1922年4月23日東京版朝刊6面
- 東京朝日新聞 1935「井土靈山氏」1935年7月23日東京版夕刊2面
- 東京横濱毎日新聞 1879「改題分局ノ因由」1879年11月18日1面
- 讀書新聞社編輯部編 1932『新聞・雜誌編輯者・記者の基礎知識』讀書新聞社
- 内藤湖南 2009「次韵送井土靈山之東京」内藤湖南『内藤湖南漢詩文集』廣西師範大學10頁
- 中村不折 1933『十七帖の研究及口譯』雄山閣
- 長澤孝三編 2011『改訂増補漢文學者總覽』汲古書院
- 南畫鑑賞 1935「本會顧問井土靈山先生逝去」1935年8月号57-58頁
- 南畫鑑賞會 1935「弔辭」（辻・井土・板垣 2002の67頁に収録）
- 錦織積清 1885『晚香詩文鈔』森江佐七
- 日本近代文学館編 1977『日本近代文学大事典第一巻』講談社
- 白居易原著・町田柳塘・井土靈山選註 1912a『白樂天詩集』崇文館
- 白居易原著・町田柳塘・井土靈山選註 1912b『續白樂天詩集』崇文館
- 白居易原著・井土靈山譯註・國分青厓校閲 1913『選註新譯白樂天詩集』三陽堂書店
- 白居易原著・井土靈山選註 1913『新釋白樂天詩集』弘学館
- 橋本胖三郎述・井土經重記 1886『治罪法講義録』博聞社
- 針ヶ谷鐘吉 1984「国立公園設置を提案せる一史料：井土經重の「箱根園論」」『国立公園』413号14-16頁
- 半谷清壽 1906『將來之東北』丸山舎
- 比屋根照夫 1982「自由民権期の国家像」『年報政治学』33号15-38頁
- 富海臥雲 1899「井土靈山君を訪ふ」『花の土産』4号25-27頁
- 福岡縣廳庶務課別室史料編纂所 1948「筑前の藩校」福岡縣廳庶務課別室史料編纂所編『福岡縣史料叢書第參輯』1-4頁
- 福島県編 1964『福島県史 第十一巻 資料編六 近代資料一』福島県
- 藤井太 1949『山陽新聞七十年略史』山陽新聞社
- ヘーン、井（Hoehn, Heinrich Friedrich Wilhelm）・湯目補隆等譯・井土經重筆記1886『警察講義録』博聞社

- 毎日新聞 1886「本社移轉改題の趣意」1886年5月1日1面
 毎日新聞 1894「錦織誣告事件公判」1894年4月17日2面
 毎日新聞 1896a「日暹協會」1896年9月6日5面
 毎日新聞 1896b「同志倶楽部の組織會及臨時大會」1896年12月1日2面
 毎日新聞社 2002a『「毎日」の3世紀：新聞が見つめた激流130年 上巻』毎日新聞社
 毎日新聞社 2002b『「毎日」の3世紀：新聞が見つめた激流130年 別巻』毎日新聞社
 前田黙鳳 1917「古來字體の變遷」『書道及畫道』2巻1号24-29頁
 松井廣吉 1929『四十五年記者生活』博文館
 松村茂樹 2016「日本文化界吳昌碩関連年表」『人間生活文化研究』26号202-205頁
 万君超 2017「张大千三十岁自画像」『中国文化報』2017年11月12日4版
 御厨貴編 2007『後藤新平大全』藤原書店
 水野龍 1906『南米渡航案内』京華堂
 三田商業研究會編 1909『慶應義塾出身名流列傳』實業之世界社
 宮澤昇 2014『書道雑誌文獻目録』木耳社
 村嶋英治 2013「戦前期タイ国の日本人会および日本社会：いくつかの謎の解明」100年史編集委員會編『タイと共に歩んで、泰国日本人会百年史』泰国日本人会 10-46頁
 本山彦一 1937「兒島灣開墾史の後に書す（明治三十六年）」故本社社長傳記編纂委員會編『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社 150-155頁
 門奈直樹 1993「解説 明治二〇年代の『毎日新聞』」『東京横濱毎日新聞／毎日新聞 復刻版46巻』不二出版 1-7頁
 山田健太編 2014『ジャーナリスト人名事典 明治一戦前編』日外アソシエーツ
 やまと新聞 1911「社告」1911年10月28日夕刊4面
 山本悌二郎・紀成虎一 1927『宋元明清書畫名賢詳傳』丙午出版社[ほか]
 結城琢編輯・井土經重補輯 1915『情聲詩存』結城琢
 李寅生著・宇野直人・松野敏之監訳 2016『漢詩名作集成日本編』明德出版社
 李白原著・森槐南校閱・井土靈山撰註 1910『李太白詩集：選註』崇文館
 靈山 1898a「剪燈夜話」『山陽新報』1898年10月12日1面
 靈山 1898b「閑谷疊を觀る」『山陽新報』1898年12月10日1面
 靈山 1898c「範山摸水の評」『山陽新報』1898年12月6日1面
 靈山漫筆 1899a「三日たび（二）」『山陽新報』1899年4月8日1面
 靈山漫筆 1899b「三日たび（三）」『山陽新報』1899年4月9日2面
 靈山漫筆 1899c「三日たび（四）」『山陽新報』1899年4月11日2面
 靈山生 1920「出版狂」『書道及畫道』5巻4号50-51頁
 靈山醉筆 1899「送窮瘞愚」『山陽新報』1899年1月1日7面
 若林彪纂註・井土經重校 1893『纂註 正續文章軌範評林』文林閣
 若松丈太郎 2002「靈山・井土經重」『福島・自由人』第17号25-39頁
 若松丈太郎 2010「警察練習所時代の井土經重：「靈山・井土經重」補考」『福島・自由人』25号164-172頁
 若松丈太郎 2016a「言論人井土靈山1」『福島民報』2016年3月5日18面
 若松丈太郎 2016b「言論人井土靈山2」『福島民報』2016年3月12日23面
 若松丈太郎 2016c「言論人井土靈山3」『福島民報』2016年3月19日22面
 若松丈太郎 2016d「言論人井土靈山4」『福島民報』2016年3月26日22面
 早稲田文學〔第二次〕1914「彙報」1914年6月号1-15頁
 和田祥重 1889『農業要録』須原鐵二

キーワード：日本漢詩、書道、漢学、自由民権運動、明治期の法律

Abstract

Ido Reizan: a biographical sketch

Shinji Ido

An anthology of Sino-Japanese poetry published in 2016 comprises a well-annotated collection of classical Chinese poems with translations in *kundoku*-style Japanese. One quatrain that appears in the anthology was penned by Ido Reizan (1859–1935), of whom the annotator writes as “a Meiji-era poet whose career is obscure”. This obscurity is somewhat surprising given that Reizan was a prolific writer who authored dozens of books and founded a magazine which enjoyed a readership of tens of thousands; he was also personally acquainted with such political heavyweights as Hara Takashi and Gotō Shinpei, as well as with a number of artists such as Nakamura Fusetsu, Komuro Suiun, and Zhang Daqian. This paper attempts to trace Reizan’s career, which spanned activism, journalism, calligraphy criticism, and classical Chinese poetry.

Keywords: Sino-Japanese poetry, calligraphy criticism, Sinology, Freedom and People’s Rights Movement, law in Meiji Japan